

## 自己関係性の視点から見た解離

野 口 寿 一

### I. 問題

#### 1. 自己関係性の視点から見た解離

解離 (dissociation) は Janet が初めて導入した概念である。ICD-10 (1992/1993) では、"過去の記憶、同一性と直接的感覚の意識、身体的運動のコントロールの間の正常な統合が部分的にあるいは完全に失われる"状態とされている。解離性障害は、健忘、遁走、解離性同一性障害 (多重人格) など、「断片的ないし複合的な記憶が欠落する」「人格が交代して自らの意志を離れて行動する」という症状を示し、「感情や現実感が失われる」離人症状を伴うことも多い。解離性障害はほとんどが外傷性障害に含まれる (岡野、1995) という指摘にもあるように、解離は主に心的外傷との関連で研究されている。

ただ、現代では自分の身体や行動に対する実感のなさや、葛藤のなさなど、解離的な意識のあり方が多く見られることが指摘され (河合、2003; 高石、2000)、心理療法において、解離性障害や明確な心的外傷体験をもたないクライアントの場合でも解離的なあり方が問題となることは多い。そこで、解離を心的外傷によって特異的に引き起こされる「症状」として捉えていくのではなくて、意識のあり方やパーソナリティとの関連で捉えなおす必要があると思われる。

解離の捉え方は、意識の流れの併存を仮定するもの、注意資源の偏り・歪みとするもの、上位統合機能に注目するもの、意識の変性状態とするもの、自己概念や自伝的記憶と体験の一貫性に注目するもの、表象による体験の社会的・文化的構成との関連で考えるものなど様々なものがある (田辺、2004) が、本稿では心理療法を念頭において解離を捉えてみたい。心理療法は、クライアントが悩みや自分の置かれた状況、そして自分のあり方を振り返り、それらに向き合う作業を伴っている。すなわち「自分について」語る、「自分を」理解、受容するなど、自らが自己に関係していくという自己関係性 (森岡、2005) の構造を持っている。そこで自己関係性という視点から解離に関する研究を整理する。

人間のもつ自己関係的な構造のもっとも基本的なものは、自らについての意識である自己意識と思われる。自己意識をもつことは、自己を他者の他者として把握すること (谷村、1993) であり、他者の目から自己を見る、すなわち自己を他者として対象化して眺めることである。それはいわば、自己と他者の自己との関係性である。自己意識は、自分の精神活動をモニタリングし、体験と空想、現在進行中の体験と想起を区別し、体験過程を自らの経験として統合する機能を持っている (田辺、2004)。それは、上位の視点から距離をとって自分の活動を把握することで過去と現在の自己を結びつけ、個人的な記憶の一貫性や自分がどういう人間であるかというアイデンティティを支えるものである。

解離については、観察自己と体験自己が調和的・統合的に働いていない (Lerner, 1998)、現在を過去、未来と結びつける力と自己知覚を伴う上位意識の問題 (Allen, 1993) などが指摘されており、上位から自らの活動や体験を観察して自分の歴史の中に位置づけていくという、まさに自己意識の問題であることが示唆されている。Horowitz (1992) は外傷体験の記憶は記憶され保持されるが、その記憶と自己を結びつけることが困難であると述べており (Lehner, 1998)、解離はエピソード記憶のうち、特に自己に関連した情報に対する自伝的記憶の問題と言われている (Allen, 1993)。

以上のことは、「自らについて物語る」という側面から考えることもできる。ここでいう「物語る」とは、ただ表現する言葉を持っている、言語化できるということではなく、自分のこととして自らの生活史に位置づける形で語ることを言う。Janet (1929/1955) は、人間は行為と言語という二通りの存在の仕方をしており、自らの行為を復誦することで両者を統一していると述べ、多重人格や夢遊病を“自分の生活の事件を物語る能力の欠陥”“体験の復誦の障害”として捉えた。これは、語ることができない心的外傷体験は、言語で語れる「ストーリー」になって始めて自らの生活史に位置づけられる (中井, 2000) という治療論につながるものである。

このような視点は特に自己意識に注目したものであり、意識のあり方としての解離を理解するのに適していると思われる。この視点は、ICD-10に記述される症状のベースにあるものを捉える一つの切り口であり、症状を直接取り上げはしないが、軽い解離や解離の健康的な側面に焦点を当てた研究とは異なることを付け加えておく。

## 2. 自らの解離的なあり方との関係性

自己関係性という視点からは、解離は自らの体験や行動を意識し物語ることの困難と捉えられたが、臨床的には自らの解離について意識したり語ることができる場合が見られる。浅田 (2004) の事例では、クライアントは「スイッチを入れる」ように自分で解離を起こすことができるという。その事例に対して神田橋は必要に応じて適切に自在に解離を引き起こすことができるという、解離の治療の第一段階を終了しているとコメントしている。この事例では、自らの体験や行動について意識せずコントロールを外すという自分のあり方を意識し、語り、コントロールできている点で自らの解離的なあり方との関係性が保たれていると言える。また、自らの解離を主訴として心理療法の場に来談する場合と、本人は自覚なく他者に連れてられて来談する場合では自己関係のあり方は異なると考えられ、それによって治療のプロセスが異なってくることが予想される。このように、解離的な特徴をもったクライアントにおいても、その自己関係のあり方を丁寧に捉えていく必要があると思われる。本稿では、解離的な特徴を持った人の自己関係のあり方の諸相について検討することを目的とする。

## 3. TATを用いた自己関係性の研究

絵を見て自由に思い浮かんだ物語を作る投影法であるTATは、自分自身に向き合う契機としてしばしば用いられる。山本 (1992) は、プロトコルをクライアントにフィードバックして特徴を話し合うことで、クライアントが物語を自分に関連付けていく過程を共にすることを試みている。また、高橋 (2005) も自分自身が作ったTAT物語を見直し、自分自身に触れるという体験

に注目した研究を行っている。

野口（2005）は、自己関係性という視点から解離について検討するため、TATの変法を用いた。その変法とは、図版を見て自由に物語を作るという従来の課題に加え、さらにもう1つ、先の物語の主人公以外の登場人物を主人公とした物語（裏物語）を作る課題を加えたものである（裏物語法）。裏物語課題では、「登場人物」という点で一つの物語（表物語）との関連が求められると同時に、新たな視点に立つことが求められる。すなわち、語り手の性質が投影された表物語（自己）に対して、他者的な視点から関わるという課題である。野口（2005）はこの方法を用いて健常者を対象とした調査を行い、表物語のテーマ<sup>1)</sup>に対して裏物語でどのように関わるかに注目して帰納的に反応を分類し、CAS（不安尺度）やDES（解離体験尺度）の結果とあわせて検討した。その結果は、特に自己について振り返る際に、自分のこととして認めたくないあり方や、他人事のように感じられるあり方に焦点をあてて野口（2006）で報告した。本稿では、特に解離的な自己関係のあり方と考えられた反応を取りあげる。

まず全体の反応の過半数を占めた標準的な反応について触れておきたい。それは表1の反応のように裏物語課題において表物語のテーマを取り上げて、それについて裏物語の主人公（裏主人公）が「良くない」「嫌」「心配」「なんとかしたい」など、自身の価値判断や感情を交えて関わっているものであった。この裏主人公の関わり方は、表主人公と異なる立場でありながらも、表物語のテーマを体験し、共に考えるようなものである。このような反応では、語り手は裏物語において、一度表物語として表現した自分のあり方に対して、異なる観点に立ちながらも再度自分のこととして関与していると言える。それは、自分の体験や行動について内省し主体的に向き合っている自分のこととして引き受ける、適切な自己関係性と考えられた。

それに対して、解離的と考えられたのは、表2の反応のように裏物語において、表物語のテーマの内容をせいぜい予感レベルでしか取り上げないか、全く取り上げないものであった。このような反応では、表物語として表現した自分のあり方に対して、再び取り上げて向き合うことが起こっていない。それは自分の体験や行動について振り返って自分のこととして引き受けて行くことが起こらない解離的な自己関係性と考えられた。

この方法が、TAT物語を直接語り手にフィードバックする方法と異なるのは、自分に向き合いそれに関わることを、物語として語らせる点である。直接自分と物語を関係付けるのではなく、空想上の物語という守りの中で自己関係を扱うことができるため、特に自らと関連付けることに抵抗や困難がある場合も「予感レベルにとどめようとする」など、どのように関わる／関わるまいとしているのが物語の構造や主人公の様子として具体的に表れやすいと考えられる。

本稿では、野口（2005）で行った調査のデータの中から、共に解離的な特徴をもっているが自己関係のあり方が異なる2つの事例を取り上げて考察する。その際、調査場面における反応の継続的な変化を検討することで、心理療法との関連でも考察したい。

表1 標準的反応の例(野口、2005)

(…は省略を表す)

【図版1】《表物語 主人公:少年》…この子は、ちっちゃい時からバイオリンを続けてるんだけど、こう、今バイオリンがこう、うまく弾けなくて、こう思い悩んでいるこの姿。…お母さんに練習しろって言われるんだけど、うまく弾けないから、もう嫌になってるんだけど、でもバイオリンは嫌いじゃないけど、でももう弾きたくないんだっていう微妙な葛藤に。…。

《裏物語 主人公:母(図版外)》今話をした中にでてきたお母さんを主人公にして。…バイオリンを、こうやらせてみたら、もしかしら才能があるかもしれないと思って、やらせてみたんですけど、どうも、がんばってやれとは怒ってみるんだけど、今はなんかちょっと面白くなさそうだなっていうのを分かかって、それでも、ここでくじけさすと、この子の教育にもよくないだろうと思って、こう、怒っているながらも見守っている。

表2 解離的な反応の例(野口、2005) (…は省略を表す)

【図版13MF】《表物語 主人公:図版の男性》…この前の男の人は、なんか、おかしくなっちゃって、自分の、こう、奥さんが恋人かちょっとわかんないんですけど、ま、死んじゃったのを…お葬式にも出せずに、ずーっとベッドの上においておこうとして、と思います。で、なんか、話しかけてもしやべらないし動かないのをみて、泣いてますね。

《裏物語 主人公:隣人(図版外)》この、ご近所の人で、最近隣の、この人が、なかなか姿を全然見かけないし、なんか、部屋に籠もりきりで、で、なんか、悪いにおいもしてきてるもので、この人何してるんだらうって怪しんです。それで特に何事もなかったらいいんですけど、何かありそうで警察に通報しようか迷っているところです。

## II. 方法

1.被験者(語り手) 大学生を中心とした、男性24名、女性29名の計53名(18~31歳、平均年齢21.1歳)の中から本稿の目的に合致する2事例を選んだ。

2.調査材料<sup>2)</sup>

(1) TAT 図版は表物語の内容を大きく規定すると思われる。悩みやネガティブな感情が表物語のテーマとなる場合、裏物語課題は特に臨床場面に近づくと思われる、以下のセットを用いた。Murray版TAT図版のうち、悩む様子が語られやすい図版1、ネガティブな自己像が語られやすい3BM、見るものにショックを与えやすい13MF、3者の対人関係や前後景の対照性の処理が求められる図版2の計4枚を選んだ(呈示順)。

(2) DES (Dissociative Experience Scale) Putnum (1997/2001) が解離性障害のスクリーニングを目的として作成した26項目からなる尺度。

3.手続き

個別面接でDES、TATの順に実施した。TATは、一枚の図版について従来の教示で物語を作ってもらった後、「今のお話の、主人公以外の登場人物を一人選び、その人物を主人公にしてその人の視点からもう一つお話を作ってください。」と教示した。「登場人物」に関しては、表物語に関連のある新たな人物でもよいとし、すでに言及された人物に限定はしなかった。以上を各図版に対して行った。その際、承諾のもと録音を行い、反応内容の記録は録音によった。

## III. 結果・考察

1. 事例1の特徴

まず、事例1(表3)の特徴について検討する。語り手Aは20代の女性である。DESの得点は

21.3点で、被験者全体の平均16.1点 (SD11.6) を上回っていた。

表 3 事例 1 のプロトコル (…は省略)

【図版 1】《表物語 主人公:図版の少年》この子は、バイオリンの練習をしていて、何かうまくいかなくて、悩んで、いる、感じで、楽器を前にして楽譜を見ながら何でだろうって思っているんだけど、考えてるうちに、多分、その楽器のこととか曲のことじゃなくて、他の事に考えがいつてしまうんじゃないかなー(笑)という表情をしているように思います。

《裏物語 主人公:妹》この男の子には妹がいて、その妹が、お兄ちゃんが練習の時には隣の部屋とかにいるんだけど、楽器の音がやんだので、どうしたのかなーって思って、お兄ちゃんの様子を見に行ったらおにいちゃんはじっと黙って楽譜を見てて、どうしたの、どうしたのって妹は、お兄ちゃんに話しかけるんだけど、お兄ちゃんは、黙ってるからどうしてるのかなって思っている(笑)っていう感じで。

【図版 3BM】《表物語 主人公:図版の女性》この人の、子供とか夫とか大事な人が、死んでしまって、その人の足元で泣き崩れている感じがします。自分も後を追いたいって思うんだけど、それが叶わなくて、苦悶している感じがします。これ、からどうするかわからないけど、多分時間的には、夕方か夜で、このままずっとこの人は、朝くらいまでここにいるんだと思う。…話になってるんだろうか(笑) <足元?>…これ(イスと見られるところ)が足みたいない感じがして(笑)。

《裏物語 主人公:友人》この女の人は、は。やっぱりこれは、夫で、なくなったのは夫で。…それを聞いた友達は…ちょっと遠いところにいた友達だったから、次の日、になって、あわてて朝駆けつけてきた。…女の人は、ベッドの足元のところでうずくまっていた…で、どうしたのって…って大丈夫って…って、ゆりおこしたら、そしたら眠っていたみたいで、すーっと表情が戻ってきて、すごいほっとした感じで、で、友達はもっと早くくればよかったって思ったんだけど…友達の方もそれを見て、ちょっとやっぱりほっとしたっていうような、それくらいです(笑)。

【図版 13MF】《表物語 主人公:図版の男性》この絵の、この絵の情景は、この真ん中に立ってる男の人の…夢の中の話で、この男の人は夢の中で、すごい真っ暗なところに一人だけいて、で、歩いても歩いても光も、物にぶちあたっても全然なくて、どうしたんだろうどうしたんだろうって、ずっと歩いてたら、そしたらぼっと部屋が現れて、ああこれは、見慣れた部屋だと思って、それが彼女の部屋で、やっと見慣れたところについたと思って、見てみたら、近寄ってみたらその、部屋の中で女の人が死んでいたの、それで、すごい…悲しんでいる。やっと、見慣れたものに会えたと思ったのに、また会えると思ったのに、死んでしまっているというような状況、のようには思います。

《裏物語 主人公:図版の女性》んって、この女の人は、この男の人の隣に寝ていて、で、夜中なんかふっと気配を感じて、目を覚ましたら、なんか隣の男の人が寝ながら涙ぐんでいたから、びっくりして、どうしたのって…って、揺り起こしたら、男の人が目を覚まして、しばらくぼーっと自分の顔をみていたんだけど「いや、なんでもない、悪い夢を見たみたいだ」みたいな事を言って、それでなんとなくそのままみたいな場面の感じ…。

【図版 2】《表物語 主人公:図版後景の女性》主人公は、この右側にいる、中年の女性…農家のお上さんで、で、一日の作業が大体終わって後は…物思いにしず、物思いに沈むって言うか、夕方、夕焼けの様子を見つめている感じで、それでこの女の人の若いころの姿が、この左側にいる凛とした、本を持った女の人で、でこの…農家のお上さんは、若いころは、すごい本を読んだりするのがすごい好きで、勉強が好きな女の子で、で、すごい、うーん、先生になったり学者になったりみたいなのを夢見てがんばっていたけど、ああ今は私は農家のお上さんなんだわっていうのを夕日を見つめながら思っている、というような場面に見えます。

《裏物語 主人公:図版の男性》このお上さんの夫、は、木の方をずっとみると、いつものようにお上さんが木にもたれかかっているのは。だけれども、すごいその日は夕焼けがきれいな日で、夕日がお上さんの顔に当たっていて、で、その、お上さんの、様子は、昔の若いころの、その若かった女の子の様子とは、まったく違う、なんかふくよかな体つきだし、すっかり農家のお上さんっていう感じなんだけれども、夕日に照らされた顔が昔の、凛とした女の子の表情をすごいして、その夫は、すごいはっとして、なんてやっぱり美しい顔だっていう感じで見つめるっていう、見つめています(笑)。

事例 1 の表物語では、かなり詳細に感情が語られている。特に図版3BMでは、大事な人を失っ

た悲しさや後を追いたい気持ち、それが叶わず苦悶する様子などが語られ、図版13MFでは、暗闇の中で一人彷徨い、ようやく出会った見慣れたものである女性さえも死んでいるというような、繰り返し体験される孤独感が語られている。図版の状況の記述に終わったり、特に図版3BMや13MFで人物に心的な悩みを見出さずに「疲れている」「眠っている」と身体的な意味づけをするような反応が見られることがあるが、それと対比すれば、Aは苦しみや悩みなどのネガティブな内容についても内面を語ることができていると言える。

裏物語における表物語のテーマへの関わり方にはかなり一貫した特徴が見られる。それは裏物語において「裏主人公は知らない」と設定することで表物語のテーマを取り上げないようにしている点である。図版1の表物語のテーマは「バイオリンの練習がうまくいかず悩んでいる」というものであった。裏物語において裏主人公は表主人公の様子を気にかけるが、表物語で語られた悩みについては知らない。図版3BMの表物語のテーマは「大事な人が死んでしまって苦悶する」というものであるが、裏物語では裏主人公は表主人公のところに駆けつけるものの「(表主人公は) 悲しい顔とかじゃなくて」「ほっとした表情になった」ため、表物語で語られた苦悶を具体的に知らない。図版13MFでは、表物語における孤独感のテーマは、裏物語においては「悪い夢」として置いておかれ、裏主人公は表主人公の苦悶について知らない。Aは自ら作った物語の内容を知らなかったり忘れているわけではないにも関わらず、裏物語において表物語のテーマに対して「知らない」こととして取り上げないように関わっていることが特徴である。それはいわば自らに向けた無知の演出であり、野口(2005)における標準的な反応(表1)で、裏主人公が表主人公と異なる立場でありながらも、表物語のテーマを体験し共に考えていたのとは対照的である。

ただ、全く無知とするのではなく、裏主人公は「楽器の音がやんだことに気づいて部屋に行く」(1)、「電話がかかってきてあわてて駆けつける」「うずくまっているのを見つける」(3BM)、「気配」「涙ぐんでいるのに気づく」「悪い(夢)」(13MF)など、何か悪いことがあるという兆候や予感レベルでは表物語のテーマを体験している。Aは、裏物語課題において表物語のテーマについて詳しく具体的に考えないようにして関わっていたと考えられる。それはStern(1997/2003)が解離について述べている"詳細に考えないこと"で"輪郭はあるが、ぼんやりとしている"状態のままにしておくという関わり方と一致するものであり、表2の反応例と同じく、自分の体験や行動について振り返っても詳細に考えず、自分のこととして引き受けていくことが起こらない解離的な自己関係性と考えられる。

Aは表物語でネガティブな感情を表現できていたことを踏まえると、自己を表現することができないのではなく、そのような自分を対象化して向き合う際に、自分のこととして引き受けていくという自己関係性の側面に困難を抱えていると言えるだろう。

## 2. 事例1の継列分析

本調査で用いた4枚の図版では、最初の図版1が内面の探求へと誘う導入図版としての意味を持つとすると、ネガティブな雰囲気を持つ図版3BMは、「あなたの困っていることを話してくれませんか?」と尋ねるような意味を持っていると思われる。そこで、Aが語ったのは、大事な人を失った悲しさや、自分も後を追って消えてしまいたいような気持ちであった。続く図版13MFでは、「暗闇の中で何にもぶつからない」「見慣れた人が失われた」という、自分の存在を実感さ

せてくれる「他」の存在を喪失したような孤独感が語られ3BMで語られたテーマがさらに深まっているように思われる。

それに対して3BM、13MFの裏物語における関わり方は、すでに述べたように表物語のテーマを新たな視点から再体験するのではなく、「知らない」として取り上げないものであった。すなわち、自らの語りに対して、語り手自身がそれを自分のこととして受け止めていなかった。自分で受け止めることができないにも関わらず、語りがより深く苦しいものへと展開することは、もしその語りに耳を傾けるテスターがいなければ、危険なことであったと思われる。

ただ、最後の図版2の裏物語においては表物語のテーマへの関わり方がそれまでとは異なっている。「自らの過去を振り返り、昔と今の自分の差異を感じる」という表物語のテーマを取り上げ、それに対して裏主人公は「まったく変わってしまったけれども、昔と同じ凛とした表情をしている」と感じている。Aは表物語における自らの語りを受け止めつつ、異なる見方から関わっている。

また、このテーマ自体が「自らを振り返る」という裏物語課題と関連していると思われる。Aはそれまでの図版では、自ら語ったことに対して「知らない」としてその内容を詳細に考えることを避けており、そこでは、いわば振り返る自己と振り返られる自己との断絶が起こっていた。裏物語課題ではまさに「昔（表物語）と今（裏物語）の自分の差異」が繰り返し体験されていたのではないだろうか。このような自らの不連続的な自己関係性をテーマとして取り上げることができたのには、表物語の内容もそれを「知らない」とする裏物語も同じ語り手Aの語りとして聴くテスターの存在が大きいと考えられる。Aはそのテスターのまなざしを取り入れ、自らの不連続性を認めつつも連続性・同一性を確認して、調査体験をおさめたように思われる。

### 3. 事例2の考察

次に、事例2（表4）の特徴について検討する。語り手Bは30代の女性である。DESの得点は33.9点というかなりの高得点であった。

事例2の表物語では、「気絶する」（図版3BM）という意識消失や、衝動的に性関係を結んでしまう（13MF）など、表主人公が意識的な統制を失うという解離的な性質をもっていたが、そのようなあり方に対する裏物語での関わり方がこの事例の特徴であった。図版3BMの裏物語では、気絶する表主人公のあり方を取り上げ、医者をお勧めするなど「治した方がいい」という立場で関わっており、それは「慣れてるから大丈夫」と言う表主人公との対立を引き起こしている。それはすなわち、自らのあり方を振り返って葛藤するような自己関係性である。また、図版13MFの裏物語では、まさに表主人公が体験したことを再体験するように同じテーマについて語っている。いずれの裏物語でも、裏主人公は表1の反応例と同様、表物語のテーマを再体験したり、それについて共に考えるように関わっている。Bは、解離的な特徴を持ちつつも、それについて自ら振り返って葛藤したり、再体験することが可能であり、それを自分のこととして引き受けるような関係性を持っていると言える。

表4 事例2のプロトコル (…は省略)

【図版1】《表物語 主人公：図版の少年》んっと、この男の子はバイオリンを習っていて、で、ちょっとうまくいかないことがあって…悩んでいるところです。それまで、割とバイオリン好きだったんだけど、今日はじめて、止めたいなって思った、感じの場面です。〈これから〉>…ほんととは、もとお友達とか遊んだりとかそういうことをしたいんだけど、なんかバイオリンのために結構練習とかをしないといけないので、そういうのが嫌だなーと思い始めていることにも気づいて、でも最終的にはこの子はもう一回がんばろうと思って、バイオリンの練習をします。

《裏物語 主人公：先生（図版外）》えっとじゃあ、バイオリンの先生が、女の人で、えー、音大とかでて、うーんと、本当は演奏家とかになったかったんだけど、結婚したしその他いろんな生活のこととかあって、でもなんとなく働いたりとか、バイオリンと関わっていきたいなと思って、で、バイオリンの先生を（笑）…それまでは厳しいのがいいというスタンスでやってきた先生だったけど、えっと、なんかあの、音大へ入れるためとかそういう芸術系に進む人のために教えようと思ってた人だったけど、ちょっと最近、なんのためにそんな厳しくしてるのかなーと思って、ちょっと自分の教え方も迷い始めた、感じです。

【図版3BM】《表物語 主人公：図版の女性》この人は、えー、30前後の女性なんですけど、時々、昔から倒れちゃうっていうか、気絶することとかがあって、今もそういう症状がはっと訪れて、ちょっと出かけようと思ってたのに、なんとなく気分がわるいののでう倒れこんでしまった、というところで、で、多分この数十分後とかに、急にはっと目覚めて、あ、また倒れてたと思って、で、時間を確認して、今日出かける予定だったところの、ところに？多分出かけます。はい、以上です。

《裏物語 主人公：旦那さん（図版外）》えっと、この人は結婚して旦那さんがいるんですけど、こういうことがあるっていうのは前からきいて、自分も何回か目撃したことがあるし、医者へいけよっていつてるけど、なんか、なかなかもう昔からだからしょうがないとかいって、医者にもいっても治らないとかいって、慣れてるから大丈夫とかそんな感じでずっと過ごしてきた、で、今その人は、旦那さんは、仕事にいって、またこういう風に倒れてるってことは、知らないんですけど、また、夕食のときとかに、また倒れちゃってね、みたいなことを言ったら、またやっぱりそろそろ医者に（笑）行ったほうがいいよとか、ちゃんと検査してもらったらって、多分、繰り返すと思います。

【図版 13MF】《表物語 主人公：図版の男性》この、人は…ときどき、無性に悲しくなったりして、えっと一行きずりの女の人と、なんかホテルとかいっちゃうような、ことをしてしまうので、今回もあーまたやってしまったと思って、嘆いているところです。で、なんかなんとかしなきゃいけないなとこの人は思っているの、といいつつ、また普通の生活には戻んですけど、多分またおなじことを繰り返してしまうと思います。

《裏物語 主人公：図版の女性》…この人はこの夜、最後にいた店で一緒に話してて、なんとなくよっぱらった勢いでここに来てしまったんですけど、んーと、ま、目覚めたら、あーまたなんか同じことをやってしまったと思って、でもちゃんと普通の生活はしているので、働いていたりとかそういうことで。なので、また何もなかったかのように、普通に会社とかいっていつもの仕事をして、時間通りはたらいて、また帰んですけど、その後が、なんかきけないというか（笑）なんとなく寂しくて家に直行できなくて、デパートとか回って、なんかちょっと食べて飲んで帰るかなと思ってからいけない、という悪循環をなかなか断ち切れずにいる人です。

【図版2】《表物語 主人公：図版前景の女性》…この女性は、まだあんまり女の人が大学にいなかった時代に大学に入った人で…大学の中では普通に、あの…あんまり違和感なく実験とかしてやられてたんですけど、ちょっと外に出て、いろいろ現場をみて、やらなきゃいけないっていう必要性を感じて…農場にきたんですけど、あの一、結構その世界がワイルドで、戸惑っている、毎日です。で、人とも、自分が接してきたような人ともちよつと違うし、寝込んだりもしてたんですけど、もう帰っちゃおうかなと思いつつ、でも、なんかなんで、ここまできてて思って、気を取り直して、再び外にでてきた、ところ。で、これからは、うん、底をうったっていうか、気をとりなおしたので、がんばってなんとか自分が決めたことはやりとおして、えっと、街に帰る、はずです。

《裏物語 主人公：図版後景の女性》…この人とかは、もう、んと、勉強ってなんだろうとか、そういうことも、もう理解できなくて…農場の様子をみさせてくれた時も、なな何いつてんだかって感じであまり取り合わなかった、感じなんですけど…でもなんか寝込んだときとかに結構いろいろ話をして、なんかそういう生き方もあるんだ、そういう世界もあるんだって、ちょっと知って、それをきっかけに、少し好意的にというか、親切になっていく感じです。



#### 4. 事例2の継列分析

図版1では、表主人公はバイオリンがうまくいなくて悩み、「本当は遊んだりしたい」「練習しないといけないのが嫌」と思っている。物語の最後には、やや唐突に「でも最終的にはもう一回がんばろうと思って、練習をする」という結論を出す。その唐突さからは、Bはやめたい気持ちを「切り捨てる」と言う形でその葛藤を処理したことが窺われる。

裏物語では、一見表物語の状況や表主人公のあり方などには言及していない。しかし、裏主人公の「音大を出て演奏家になりたかった」という成就欲求やそれに伴う厳しさは、表主人公が「がんばろう」の奥で体験している気持ちと考えられ、間接的ではあるが表物語のテーマを取り上げていると言える。そして、裏主人公は、自分の厳しいやり方について振り返り疑問を投げかける。Bは、図版1において、がんばりたくない気持ちを切り捨ててがんばろうとするような自らのあり方を語った後、それについて再び取り上げて考え、「なぜそんなに厳しくする必要があるのか」と自らに疑問を投げかけたと考えられる。

続く図版3BMでは、「気絶」という形で、がんばりたくない気持ちを前面に表現したように思われる。ただ、それは気持ちとしては語られず、Bは意識のコントロールを失わせる解離的な方法でしか「がんばれない」気持ちを表現することが難しかったと考えられる。そのようなあり方に対し、裏物語で裏主人公は「治した方がいい」と対立するような態度で関わっている。B自身はそのような気持ちを表現すること、もしくはそのような表現方法に対して葛藤があることが伺われる。

続く図版13MFの表物語では、衝動的に性関係を結ぶという、意識的なコントロールを離れて行動してしまう解離的なあり方がテーマとなっているが、表主人公は「またやってしまったと思って」「なんとかしないとイケないな」と思っている」など自ら事後的に振り返っている。ここでは図版3BMの表物語で語られた解離的なあり方とそれに対する「治した方がいい」という裏物語における態度が、一人の主人公の中に葛藤として内在化されている。

主人公が求めているものは身体接触（性関係）、口唇的な快（食べ物、裏物語）によって満たされるもの、すなわち「甘え」のようである。裏物語では、表物語のテーマを同様に再体験している。それは異なる視点から眺めるよりは、再び体験して、なぞることで、「なんとかしたいと思いつつも甘えを求めてしまう」自らのあり方を再確認するような関わりと思われる。

最後の図版2の「女の人あまり大学に行かなかった時代に大学に入った人」という設定は、前述の成就欲求を連想させるし、また「がんばろうと思うが、がんばれない」という構造も図版1と類似している。しかし、図版1の物語に比べると変化が見られる。表物語の結末はやはり「がんばる」というものであるが、「ワイルドさに戸惑い」「寝込んだ」末に「底をうった」「気を取り直した」というように、「がんばれなさ」が「がんばろう」に至るまでの流れの中に位置づけられている。自らのがんばれなさや甘えを無理に切り捨てることなく、その存在を認めることができていると考えられる。また、裏物語においても、反発する気持ちはありつつも、表物語のあり方を認めることができている。

この事例は、自らの解離的なあり方を事後的に振り返り、それに対して様々に関わることを通して、解離的行動によって求めていた甘えを自分のものとして受容するにいたるプロセスを歩んだと考えられる。

#### IV. 総合考察

共に解離的な特徴を持ちDESの得点も高いが、それぞれ異なる解離的な特徴をもった2つの事例を取り上げて考察してきた。事例1は、ネガティブな感情など自分のことを表現することはできるが、そのような自分を対象化して向き合い、自分のこととして引き受けていくという自己関係性の面での困難を抱えていることが示唆された。事例2は、解離的な行動や身体化を示しつつも、それについて自ら振り返って再体験したり、それに対して葛藤するような自己関係性がもてていると考えられた。

この2つの事例の違いについて葛藤や悩みに注目して検討したい。ここでいう葛藤・悩みとは、単に「嫌なことがあった」というものとは異なる。自分の欲求と、それを阻止しようとする傾向との衝突の中でなんらかの方向性を見つけ出そうとするものであり、阻止する傾向に抵抗する主体の力を必要とするものである。事例1は、「悩んでいるうちに他の事に考えがいつてしまう」という図版1の表物語に見られるように、葛藤にとどまることができない。図版3BMや13MFでは、生じてきた事態にショックを受けるのみで、そこから道を見つけようとするところが見られない。

それに対して事例2は、図版1や図版2において、がんばろうという気持ちとくじける気持ちとの葛藤の中から、なんらかの方向性を導き出しているし、図版13MFにおいては衝動的に性関係を求めてしまう自らのあり方に対して、「なんとかしなきゃ」と抵抗する気持ちが見られる。事例1に比べて、事例2は、自分の欲求を妨げる障害に抵抗し、葛藤する主体の力をもっていると思われる。事例2の全体的な考察を踏まえると、特に図版3BMと13MFの表物語で示された解離的な行動は、自らの甘えたさを認めることができないため、意識のコントロールを外すことによって甘えを得ようとしたものと理解できたが、それも自らの甘えたさとそれを認めまいとする気持ちとの衝突から生じてきたものと思われる。このようにある欲求とそれを抑えようとする気持ちとの衝突から症状が生まれてくるあり方は、超自我との葛藤の中から疾病利得やメッセージ性を持った症状を形成するというヒステリー的なものであり、病態としては神経症の水準に近いと思われる<sup>3)</sup>。

このことは、反応の継列のプロセスに大きく影響していると思われる。森岡(2005)は、語ることによって自らの体験を他者と共有されるかたちにテーマ化し、対話的な内省を行うことで、適切な自己関係性が生まれ、自己理解や自己受容につながると述べている。Bにとって裏物語という場は、自らのあり方を語った後、それを振り返り様々な視点から関わることで、切り捨てられて解離的に求めざるを得なかった甘えを自分のものとして統合するという、まさに心理療法的な内省の場であった。Bは場が整えば、自分のあり方について対話的な内省を行なう力を持っていたと言えるだろう。

それに対して、事例1のような語り手は、自分のあり方について自ら振り返って内省することが難しく、対話的な内省の場という構造を利用しにくかったと考えられる。このような事例では、自らを振り返ることによる統合とは、異なる心理療法的プロセスを歩むのではないだろうか。すなわち、事例2に示されたような、自己について内省して関係をもつことができないという解離的な自己関係性を、自分のこととして受け入れるというプロセスである。この際、断絶した自己をすべてその人のものとしてまなざす聴き手の存在が重要になってくるとと思われる。

本稿では特に健常者の中でも解離的な特徴を強くもった事例を取り上げたといえるが、今後、病態を考慮しつつ臨床群の反応を検討していく必要があると思われる。それは今後の課題とした

〈注〉

1) TATの創始者であるMurrayによれば、なんらかの効果をもたらすよう働きかける主人公側の反応である「欲求」と、環境側の反応である「圧力」との結合関係が「テーマ」であり、TATでは、そこに、パーソナリティが表れるという(山本、1992)。

2) CASの結果に関しては、本稿では割愛する。

3) このことはDESの得点とも関連している。事例2では解離性障害をスクリーニングするカットオフ得点である30点(Putnam, 1997)を超えており、解離性障害が疑われそうなところである。自己関係においてより深い解離を抱えている事例1に比べても得点が高かったが、DESは質問紙であり、自分を振り返って意識できる範囲のものが測定されるため、解離的なあり方を内省の対象とする事例2では得点が高くなったと思われる。Allen&Smith(1993)は、DESが低得点の場合について、解離の否認、解離体験に気づいていない、測定時は解離体験が活動的ではなかったという理由による場合があると述べている。DESは解離的な体験と同時に自らの解離をどれだけ意識できているかを測定していると言えるだろう。このことから、DESはあくまでスクリーニングのためのテストであり、高得点が重症度を示しているわけではないことが確認できる。

文献

- Allen, J.G. (1993) DISSOCIATIVE PROCESS:THEORETICAL UNDERPINNINGS OF A WORKING MODEL FOR CLINICIAN AND PATIENT Bulletin of the Menninger Clinic, 57, 287-308
- Allen, J.G., & Smith, W.H. (1993). Diagnosing dissociative disorders. Bulletin of the Menninger Clinic, 57, 328-343
- 浅田由美子(2004) 症例検討会ライブ 解離症状を呈する女性との面接(コメンテーター: 神田橋條治) 語り・物語・精神療法 北山修・黒木俊秀(編著) 日本評論社
- Janet, P (1929) L'evolution psychologique de la personnalite : compte-rendu integral des conferences d'apres les notes stenographiques Paris : Chahine, 関計夫訳: 人格の心理的発達 1955 慶応通信
- ICD-10 (1992) the ICD-10 Classification of Mental and Behavioural Disorders : Clinical descriptions and diagnostic guidelines World Health Organization (監訳) 融道男・中根允文・小見山実 ICD-10精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン 医学書院 1993
- Lerner, P (1998) PSSYCHOANALYTIC PERSPECTIVES on the RORSCHACH The Analytic Press 溝口純二・菊池道子(監訳) ロールシャッハ法と精神分析的視点(下) 臨床研究編 金剛出版 2003
- 森岡正芳(2005) : 変化の理論の中の自己 梶田敦一(編) 自己意識研究の現在2 ナカニシヤ出版
- 中井久夫(2000) ト라우マとその治療経験——外傷性障害私見 「兆候・記憶・外傷」所収 2004 みすず書房
- 野口寿一(2005) 解離的な関わり方について 京都大学教育学研究科修士論文 未公開
- 野口寿一(2006) 自己を対象化する際の関わり方について—同一化作用に注目して 日本心理臨床学会 第25回大会論文集
- 岡野憲一郎(1995) 外傷性精神障害—心の傷の病理と治療 岩崎学術出版社
- Putnam, F (1997) DISSOCIATION IN CHILDREN AND ADOLESCENTES a Developmental Perspective 中井久夫(訳) (2001) 解離 若年期における病理と治療 みすず書房

- Stern, D (1997) Unformulated Experience ; From Dissociation to Imagination In Psychoanalysis 一丸藤太郎・小松貴弘(監訳) 精神分析における未構成の経験 解離から想像力へ 誠信書房 2003
- 高橋悟(2005) TAT課題における自己体験と「自意識」 京都大学大学院教育学研究科紀要 第51号
- 高石恭子(2000) ユース・カルチャーの現在 小林哲郎・高石恭子・杉原保史(編著) 大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド ミネルヴァ書房
- 田辺肇(2004) 催眠と意識現象—「解離」概念の検討— 催眠学研究、48、1、p20-29
- 谷村寛(1993) 「他者の他者」としての自己 現代のエスプリ 307、p53-62
- 山本和郎(1992) TATかかわり分析 東京大学出版会

(心理臨床学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日)

## Dissociation in self-relationship

NOGUCHI Toshikazu

There are many studies about dissociation, and it is defined in different ways. From the standpoint of clinical psychology, dissociation needs to be understood in relations to psychotherapy. Psychotherapy has a structure "I" am related to "me"; for example, "I" talk about "me", understand or accept "me". In this perspective, dissociation is understood as an impossibility of talking or being conscious about "me". But in a clinical scene, there are some people who are conscious to me. This study is about the dissociation in self-relationship. In this study, 53 normal adults were administered Thematic Apperception Test along with the self-objectification task and DES. Then the dissociative case of a woman with the capacity to talk about and be conscious of her dissociative style (case 1) was examined. And the case (case 1) was compared with the dissociative case without objectifying and talking about "me"(case 2). The results are as follows: in case 1, dissociation is temporary and the subject has the basic capacity of reflection. In a case of this kind, psychotherapy with reflection is therapeutic.